早稲田大学国際日本文学・文化研究所（WIJLC）

News Letter 世界と共創する 新しい日本文学・日本文化研究

No.2 2010.3

コロンビア・プロジェクト　共同ワークショップ
「国際交流・学問・教育の新展開―日本文学・日本文化研究の将来―」を終えて

コロンビア・プロジェクト研究分担者　陣野英則

ワークショップの概要

早稲田大学国際日本文学・文化研究所（中島国彦所長）の主催、早稲田大学国際部の共催により、コロンビア大学との共同ワークショップが、2010年1月12日（火）15：00から18：15まで、早稲田大学大隈会館N棟201・202で開催された（司会は陣野英則）。このワークショップの課題、ならびに基調報告をされた方々は次のとおりである。

〈課題〉

1. 国際的な学問・研究の現状と課題
2. 大学院生の（国際的）研究・キャリア支援
3. 今後の国際的共同研究について

〈基調報告〉

ハルオ・シラネ（コロンビア大学教授）、鈴木登美（コロンビア大学教授）、竹本幹夫（早稲田大学文学学術院教授）、宗像和重（早稲田大学政治経済学術院教授）、兼築信行（早稲田大学文学学術院教授）、十重田裕一（早稲田大学文学学術院教授）、ロバート・タック（コロンビア大学大学院生）、アンリ・ヤスダ（コロンビア大学大学院生）、ネイサン・シャッキー（コロンビア大学大学院生）、時野谷ゆり（早稲田大学大学院生）、ロバート・ヒューイット（コロンビア大学大学院生）、柴山紗惠子（コロンビア大学大学院生）、由尾瞳（コロンビア大学大学院生）、庄司敏子（早稲田大学大学院生）、塩野加織（早稲田大学大学院生）

〈以上、当日の報告順〉

ワークショップ開催に至る経緯とねらい

このワークショップは、重点領域研究にも参加してくださっているコロンビア大学のハルオ・シラネ氏と鈴木登美氏からの発案を受けて開催されることとなった。News Letter 第1号に掲載された「コロンビア・プロジェクト報告」にも記したとおり、早稲田大学大学院文学研究科とコロンビア大学との間にはダブル・ディグリー・プログラムが設けられている。既にコロンビアのPh.D.コースの学生3名が早稲田の修士学位を得ており、また早稲田の博士後期課程の学生1名もコロンビアで修士学位を得ている。さらにこのプログラムとリンクさせる形で、両大学の教員が相手方の大学に出向いてシンポジウム・ワークショップに中心的な立場で参加したり、特別講演を行ったりしてきた。こうした経緯をふまえ、上記3つの課題が設定された。

基調報告は計15名の方々にお願いした。これまでダブル・ディグリー・プログラムで研究指導にあたってこられた教員、及び同

プログラムに参加した学生には全員報告者となってもらっている。加えて、両大学における研究面での交流に関与された教員、また交換研究員等として早稲田で研究にとり組んだコロンビアの学生（Ph.D.コース）、さらには早稲田に留学してきた学生たちと一緒に研究に励んでいる早稲田側の学生（博士後期課程）にも、それぞれの立場から報告してもらうこととした。人数を絞る方法もありえただろうが、今回は個々の教員・学生の経験にもとづく知見、アイディアをなるべく多角的に出しあってみようと試みたのである。

なお、ラウンドテーブル形式で行われた今回のワークショップは、今後の国際的な共同研究の新しいアイディアを具体的に出しあう試みでもあったので、あえて完全公開の形にはせず、ワークショップの案内も早稲田の教員と学生にほぼ限ることとしたが、当日は、学内の日本文学・日本文化関係の教員、文学研究科の学生などを中心に、多数の方たちが参加され、予想以上に盛況であった。

ワークショップでの報告と討議の概要

当日は、まず大日方純夫・文学学術院長のご挨拶があり、「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」と題された重点領域研究のあらましと、文学学術院に関わる新たな国際的研究の動向などに言及していただいた。

次いで、両大学の教員（計6名）の報告に入った。まずコロンビア側のシラネ氏によって、国際交流の古いスタイルと現在のスタイルの違いが整理され、特に上述のダブル・ディグリー・プログラムの画期的な面が確認された。あわせて、相互の共通基盤を

より強固にしてゆく必要があること、殊に日本国内の日本文学・日本文化に関する研究がまだまだ英語圏に向けて発信されていないという現状の問題点が指摘された。次いで同じくコロンビアの鈴木氏は、日本文学・日本文化研究が制度・歴史との関わりの中でいかに展開してきたのかということをおさえられた上で、日本文学研究のディシプリンを根源的に問い直すような視角を提示された。また（シラネ氏も言及されていたが）誰のために向けて発信される研究なのか、ということを常に意識することの重要性も強調された。

つづいて早稲田側からは、まず竹本・宗像の両氏が国際的研究の現状と課題について報告された。竹本氏は、演劇研究のグローバル COE 拠点リーダーとしても豊富な知見を有されている。今回は、人文科学が今まで以上に社会あるいは他者と積極的に問題を共有すべきことを提言されるとともに、共同研究のいっそうの開拓の必要性について述べられた。宗像氏は、早稲田大学図書館副館長でもあり、同図書館の古典籍データベースに関わるエピソードを紹介されたのち、ディジタル・アーカイヴが当たり前となった今こそ、「ディジタルからアナログへ」という、いわば逆説的な認識が必要であることを説かれた。あわせて研究論文の公開が進まない日本の現状についても言及された。

そのあと、兼築・十重田の両氏が大学院生の育成・キャリア支援について、それぞれの経験をふまえて報告された。兼築氏は、この間の人的交流の実状とその意義を紹介されるとともに、留学生も日本人学生も日本古典文学の一次資料を本格的に扱うという点で同じ土俵に立つ時代になったということなどを述べられた。一次資料の活用に関しては、つづく十重田氏の報告でもふれられていた。また十重田氏は、共同育成プログラムのポジティヴな面として、文化差を前提とした議論から文化差を解消するためのやりとりが重ねられ、さらには学際的状況を引き寄せるような効果が生まれるということを報告された。また、その報告に即して、より具体的な共同研究のためのアイディアも示された。

休憩後には、計 9 名の大学院生に報告してもらった。ダブル・ディグリー・プログラムの参加者（5 名）は、それぞれの経験をきわめて具体的に紹介され、このプログラム参加によってえられたアドヴァンテージを語ってくれた。また、それ以外の学生も含め、それぞれが気づいている問題点、改善を要する点なども出してもらった。たとえば、相手方の大学の大学院生が展開している研究の内容を学んだり互いの論文を読みあったりする機会がまだまだ不足していること、共通のテクストづくりなどがこれから必要になるだろうということ、日本側の研究が個別的に過ぎる傾向

があること、等々である。

以上 15 名の方々の報告ののち、あらためて今後の共同研究に関する具体的なプランを出しあった。複数の報告者から、相手方の研究にふれたり、それを理解したりするための基盤を作ることが急務であるという見解が示されたので、その実現に向けたプランについての話が中心となった。その折に出されたアイディアをここに逐一記すことはしないが、それらはまさに、この重点領域研究の活動の柱ともなりうるものであろう。

なお、討議の時間はきわめて限られてしまったが、特に日本で発表されている学術雑誌掲載論文のほとんどが、今なおインターネットで閲覧することができないという事態に関して――これは日本における著作権の問題が絡んでいるわけだが――国際的な研究の発信、またその進展にとってきわめて深刻であり、一刻も早く改善される必要があるということも話題にのぼった。

最後に、国際日本文学・文化研究所の中島国彦所長からご挨拶いただき、かつての文学研究においては頻繁に用いられた術語がこのワークショップの中では一度も用いられなかたといったような指摘も交えつつ、新たな国際的研究を拓く契機となるであろうこのワークショップについて総括していただいた。

今回、コロンビア大学の教員と学生の皆さんが早稲田の会議室に集結してくださったのは、特筆すべきことであった。当日のラウンドテーブルで司会を担当しながら、これは画期的な光景ではないか、とつくづく感じ入ったものである。このワークショップのためにわざわざニューヨークから参加してくださった皆さんには、特に深く感謝したい。

（文学学術院教授）

Event calendar

コロンビア大学准教授

デイヴィッド・ルーリー先生講演会

○**日時**：2010 年 5 月 28 日（金）午後（※時間未定）
○**場所**：早稲田大学戸山キャンパス
33-2号館 2 階 第一会議室

活動記録・予定

1 月 19 日（火）	イナルコ・プロジェクト、アンヌ - バヤール・坂井教授との打ち合わせ
1 月 27 日（水）	同、リュキャン教授との打ち合わせ
2 月 10 日（水）	研究所第 3 回全体会議
3 月　8 日（月）	国立 HANBAT 大学校　パク・ヘソン教授講演会

中国古典籍研究と日本―在北京図書館調査小報告

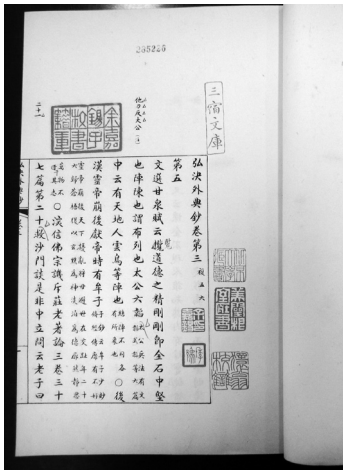
河野貴美子

2009 年 4 月より 1 年間の研究期間を得て北京大学中文系に訪問学者として滞在しています。宿舎は大学構内の勺園 5 号楼。明末の画家米万鍾の設計になるという美しい庭園を日々眺め、四季の移り変わりを楽しみながら過ごしています。学部生時代の 1984 年夏、北京語言学院（現北京語言大学）にて 1 か月の中国語研修を経験して以来、ようやく実現した初めての中国長期滞在です。

今回の目的は、中国古典籍研究に対する理解を深めること、すなわち中国古典文献研究の主要機関である北京大学にてその伝統を学び、現況を把握することにありました。そして北京大学図書館を中心に関連資料の調査を始めたところ、中国の古典籍研究ひいては中国学術界全体と日本とがいかに密接な関わりを持ってきたのかを改めて認識するに至りました。以下、北京にて興味深く調査を行った一例を紹介したいと思います。

北京大学図書館には「余嘉錫校『弘決外典鈔』四巻抄本 2 冊」（写真）が所蔵されています。余嘉錫（1884-1955）は中国近現代を代表する文献学者であり、その著作『四庫提要弁証』『目録学発微』等は中国古典学研究の手引きとして私自身親しんできたものでした。その余嘉錫が書写し校注を付した『弘決外典鈔』が存在するなどとは、日本では全く紹介されていないことだと思います。『弘決外典鈔』（具平親王撰。991 年成立）は唐僧湛然撰『止観輔行伝弘決』に対する注釈書で、仏者撰述書に対する注釈書ではありながら「外典」に関する部分の解説を旨とすることから、注釈文には「外典（漢籍）」からの引用を豊富に有するものです。余嘉錫は唐代当時の漢籍佚文を多く含むこの『弘決外典鈔』に注目し、一糸乱れぬ丁寧な筆で本文を書写したうえ、眉欄には朱書による詳細な校注を書き残したのでした。

『弘決外典鈔』は、楊守敬（1839-1914）が『日本訪書志』の中でその宝永版本の存在を紹介して以来、中国学者の注目するところとなったものと思われます。しかし、余嘉錫が書写したのは宝永版本そのものではなく、昭和 3 年（1928）に徳富蘇峰が自家所蔵の宝永版本に「金沢称名寺所蔵古抄本」との対校を書き入れたうえで影印刊行した「成簀堂所蔵宝永対校本」でした。余嘉錫は影印本の眉欄にある対校注をもすべて書写し、さらに自ら校注を書き加えているのです。



実のところ、この徳富蘇峰の影印本は限定三百部の印行で、現在中国国内にはただ一部のみの存在しか確認できない稀少なものです。そしてその一部こそが、余嘉錫が書写した「底本」にほかならないことが判明しました。

現在中国科学院国家科学図書館には、戦前日本政府が義和団事件賠償金を用いて創設した北京人文科学研究所の旧蔵書がすべて移管されています。いま中国科学院国家科学図書館には民友社社員平福百水の蔵書印「三宿文庫」を有する北京人文科学研究所旧蔵の『弘決外典鈔』影印本が所蔵されていますが、余嘉錫の書写本にはこの「三宿文庫」の蔵書印までもがそのまま書き写されているのです。当時抗日運動の高まりとともに、北京人文科学研究所の運営は多くの挫折に遭いましたが、実際には当該研究所の書籍が中国の研究者の閲覧に供され研究上の最新情報をもたらすという実態もあった、余嘉錫写本はその具体的状況を伝える遺物でもあります。

余嘉錫は、1936 年『燕京学報』に発表した論文「牟子理惑論検討」において、この三宿文庫本『弘決外典鈔』の記述を根拠として考証を行っています。余嘉錫に訪日の経験はありません。しかし余嘉錫はその炯眼をもって中国国内の限られた環境の中でも日本の学術情報を逃さずとらえ、中国文献研究の新たな突破口を切り開いていったのでした。

余嘉錫のみならず、近代以降の中国古文献学者はみな日本の伝存資料や日本の中国学研究に高い関心を持ち、それらの輸入に努めました。そうした伝統は現在にまで続き、例えば、昨学期に聴講させていただいた孫欽善先生、安平秋先生、顧永新先生など北京大学中文系古典文献専攻の授業では、毎時のように日本の資料や学術状況に関する話題が提示されます。また学生の方も、東洋文庫や静嘉堂文庫所蔵の漢籍や内藤湖南、狩野直喜のことなどは常識的に承知しています。しかしその一方で、現在最新の日本の研究成果が中国の研究者や学生の目に入る機会は多いとは言えません。例えば、図書館における日本の新刊書や学術雑誌の収蔵状況はたとえ中国学に関するものであっても決して十分ではない現状です。

そうした中、昨年 9 月創立百周年を迎えた中国国家図書館に新しく「海外中国学文献研究中心」が設置されたのは一つの画期と言えます。書籍数に限りはありますが、日本をはじめ世界各国の中国学に関わる刊行物が随時集められ、開架式で閲覧できるスペースが作られました。

余嘉錫が『弘決外典鈔』に触れ、そこから中国古文献研究に関わる重要な記述を見出したように、日本伝存典籍の中には中国学研究の立場から検討されるべき資料がいまだ多く残されています。日中双方の研究者が手を組み、日中の古典籍研究をさらに推進していくことができれば、その成果は中国古典学、日本古典学といった枠を超え、日中そして東アジア地域の学術文化の意義や価値のさらなる発見につながることが期待できます。われわれの重点領域研究も含め、近年の学術界における国際化、また中国における「海外中国学」熱の高まりなどは、それを可能にする機運だと感じています。

2010 年 2 月 23 日　於北京大学勺園

（文学学術院准教授、アジア・プロジェクト研究分担者）

韓国慶熙大学日本語科の日本研修

松本真輔

研修を終えて

2010年1月11日から14日の四日間に渡り、早稲田大学重点領域研究において、韓国慶熙（キョンヒ）大学校外国語大学日本語科の学生を対象にした短期研修を実施していただきました。お忙しい中、仲介の労をとっていただいた竹本幹夫先生、研修をしていただいた竹本先生、兼築信行先生、中島国彦先生、およびお手伝いいただいた文学研究科博士課程の金小英さん、郭炯徳さん、趙允珠さんに厚くお礼申し上げます。

研修は、日本の古典から近代文学まで幅広い内容をカバーするもので、演劇博物館や中央図書館の見学・古典籍実習・現地踏査などを交えた非常に充実したものとなりました。早稲田大学の名は韓国でもよく知られており、学生達も研修前は講義についていけるのか少し心配していましたが、反応は非常によく、大いに刺激を受けたようです。

慶熙大学校日本語科の紹介

慶熙大学校は、1949年に培英大学学館と新興専門学校が合併して出来た新興初級大学を前身とし、1960年に現学校名に変更して今日に至っています。

現在はソウル市と龍仁市にキャンパスを持ち、二六の大学（College）を擁する総合大学（Unversity）です。

私ども外国語大学日本語科は、ソウル市の南に位置する龍仁市の国際キャンパスに所属しています。日本語学科は1981年より第一期生を迎え、今年で開設三〇周年となります。学生数は一学年およそ四〇人ほどで、学科としての規模は大きくないのですが、そのぶん学生間の関係も濃密で、学生主催の学科の行事が頻繁に行われています。

韓国の大学事情と日本研究

韓国の大学は、第二次世界大戦後が終了して日本の植民地支配から解放された後に発足したものが大半ですが、朝鮮戦争の影響もあって、本格的に学問の場としての大学が発展してくるのは、1960年代に入ってからです。そして、以後開校ラッシュが続き、現在では大学進学率が八割を超えるという状況になっています。

韓国における日本関連学科は、こうした中では比較的後発組になります。時系列で言うと、1961年に韓国外国語大学、1962年に国際大学（現西京大学校）で日本語学科が設けられていますが、それ以外の多くは1980年を前後して集中的に設置されたものです。慶熙大学校の日本語科もこの時期に設立されました。おおよそではありますが、現在は八〇ほどの大学に日本関連学科があります。これ以外にも、東洋系の学科で日本語コースが設置されているところもあり、わずか二～三〇年の間に、その数は大幅に増加しました。

進学者数や科目履修者数などの正確な数字はわかりませんが、学科数などから単純に考えると、およそ一学年で三千人程が日本関連学科に進学しているものと思われます。また、近年は「複数専攻（所定の単位を履修すると学位を認める）」制度によって日本語を選択する学生も増えています。

ちなみに、日本語を「専門」に学びに来るのは、やはり女性が多いのですが、その中で圧倒的に人気なのは、漫画でもアニメでも小説でもなく、実はアイドルタレント（ジャニーズ）です。このことはあまり日本では知られていないかもしれませんが、その影響力は絶大です。

ただし、外国語として見た場合、近年は英語第一主義が圧倒的な趨勢で、中国語がそれに続いています。日本語は根強い人気があるとは言え後退気味で、世界情勢が学生の語学選択にリアルに反映している気がします。

韓国での日本文学

ここ数年、韓国内では日本の小説が数多く翻訳されるようになりました。むろん、かつても翻訳は多かったのですが、点数が爆発的に増えています。しかも、日本の小説は比較的人気があります。小説部門のベストセラーには日本人作家の本が名を連ね、時には上位独占といったことも起こります。報道によれば、村上春樹『1Q84』が一億円（！）近い契約料で翻訳出版されたとも。また、2000年以後、古典の翻訳も次々に進み、主要な作品はかなり韓国語で読めるようになりました。出版社も点数を出すことで回っているという側面があるため、日本のランキング上位にある本は、片っ端から翻訳しているような状態です。日本も翻訳大国ですが、今や韓国はそれを上回る勢いです。

このように、韓国内では、日本文学に接するインフラがかなり整いつつあります。今回の研修が契機となって、学生達がよりいっそう日本文学に関心を持ってくれることを期待しています。

（慶熙大学校日本語科助教授）

重点領域研究「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」 News Letter 第2号
2010年3月15日発行
編集：庄司敏子・塩野加織（RA）　印刷所：三美印刷
発行所：〒162-8233　東京都新宿区戸山1－24－1　早稲田大学文学学術院内
早稲田大学国際日本文学・文化研究所（WIJLC）（所長・中島国彦）